昭夫・あれこれ

西在家　寛

昭夫とは、詩人村上昭夫のことである。晩翠賞、H氏賞に輝き、このほど高松池畔にその詩碑も建立されたは周知のこと。すぐれた昭夫研究も出版されており、もっと昭夫を知りたい、昭夫のエピソードを聞かせてほしいという後輩高校生もでてきた。遠く北海道の高校生からも問合わせがきたりする。ひとつ昭夫資料室を作ってはどうかとの声が、時に職員室にも出る。

岩手高校職員室には、昭夫を教えた人、同級であった人、後輩であった人が今尚いるのだが、日報詩壇をにぎわす村上昭夫氏が卒業生の昭夫であるとは、晩翠賞までは誰も気づかなかった。当時の山中校長も、同名異人だろうぐらいに思っていたという。

土井晩翠が作詞した校歌をもつ縁で、晩翠の名を知らぬ同窓はいないのだが、校友の中から晩翠賞の詩人が出ようなどと、誰が夢想したろうか。

木枯らしの吹く初冬の一日、私は石桜同窓会報への取材が目的で昭夫を訪問した。詳しくは、昭和四十二年十一月十九日午後一時、所は国立療養所の面会室。詩人は和服姿で現われた。畳の火鉢をはさんで対坐。

「動物哀歌は友情出版なんです。処女出版が受賞するなんて……ただ感謝するだけです。幸運でした。……啄木、賢治以上と評されては負担が重いのです。この一か月はノイローゼ気味です。先日、村野先生がみえて、もう秒読みの段階に入ったと言っておられましたが……頑張らねばと思います」すでに受賞手記として新聞に発表されてあったような内容だったが、私は新鮮に聞いた。ときどき言葉を切って話した。その間、写真師M氏の注文で二、三度ポーズを変えた。静かな声、謙虚な態度、受賞の感激をつとめて抑えているようにもみえた。前日電話の時には発声が苦しそうだったが、この時には呼吸の乱れはなかった。

高田の少年時代のこと、中学時代の動員のこと、賢治のことなど興深く聞いた。賢治を読まなかったら、受賞はなかったと思いますとも言った。傾倒ぶりがしのばれた。しかし秒読みの段階に入るとはどんなこと

か、あの時私は鈍感に聞き流していた。翌年はH氏賞の受賞。そして失明、病状急変の経過をたどるなどとは思いもよらなかった。

詩人クラブ主催の受賞祝賀会には、恩師である山中校長も出席した。二十年ぶりの再会であった。その時、真先きに昭夫の口をついて出た言葉は、「先生、石桜精神で頑張っています」ということだったという。このことはいつか山中校長が全校朝礼の際生徒に話してきかせた。

「動物哀歌」の世界と「石桜精神」とは、どうみてもにわかには結びつきそうにないのだが、そこが昭夫の昭夫らしいところである。いつまでも母校を忘れず、熱い心を寄せていた昭夫であったと、同窓は感激するのである。

この春、市立図書館の昭夫展で、私はまた一つの発見をした。なにやら詩を書き連ねた原稿用紙の裏に、「黒工が盛一に勝てば、岩高は黒工に勝つ」と赤鉛筆で大きく書いてあるのがそれである。昭夫は剣道部OBであったが、これは明らかに野球のことである。

闘病、苦吟の合間に、ふと母校球児の勝運を祈ってくれたのであろうか。ちなみに、黒工と盛一が対戦し、その勝者と岩高が対戦するケースは、県高野連二十年史の記録には見あたらない。何か錯誤があるのかもしれないが、昭夫の気持はよく分る。どうやら昭和三十年前後のように思えるのだが、記録でみる限り、岩高野球部は昭夫の願望には応え得ずに終ったようである。

昭夫の同級生にきくと、昭夫は真面目で、おとなしかったという答が即座にかえってくる。では何か印象に残っていることをときくと、三十年前の記憶をまさぐる目差しの後で、どうもよく思い出せないと首をふる。派手に目立つ才気煥発型ではないのだ。いずれ同級生を中心にして「昭夫を語る会」の計画もあるやに聞いているので、中学時代の昭夫像は遠からずもっと鮮明になる筈である。

漢文の牟岐先生、英語の山中先生はともに寄宿舎の舎監でもあり、川崎動員時の統導者でもあった。寄宿舎と川崎に思い出のある昭夫にとっては、こわくもなつかしくもある先生方である。受賞式会場に、山中先生と牟岐先生令嬢の北川れいさんの姿をみて、昭夫はどんなにか満足したに違いない。中学時代の昭夫を語る会には、両先生のご出席は欠かせないことになる。

昭夫が山中先生へ宛てた最後の手紙は、原稿用紙へ鉛筆の走り書き、いや、なぐり書きで判読しにくい。失明寸前のもので文字がひどく乱れている。途中から鉛筆の跡もかすれている。芯の折れたのも気づかず、昭夫は恩師に何を訴えようとしたのであろうか。

（岩手高校教諭）